

巻頭言

「あいちを食べよう、日本の食を
たいせつに！」をコープあいちの推進軸に！生活協同組合コープあいち
専務理事 中野正二

協同と福祉の心をひろげる生協をめざして

3月21日のコープあいち誕生にあたっては、各方面の皆さんからご支援・ご協力をいただきましたことに誌面をお借りして、お礼申し上げます。

この間、めいきん生協・みかわ市民生協あわせて38万人の組合員全員に、「新しい生協にあらためて加入していただけるような運動にしよう」「組合員主人公の生協を再構築しよう」と提起し、昨年臨時総代会の議決を経て、ようやくスタートラインに着くことができました。お互い似通った生協として県内ではエリアの棲み分けがされてきましたし、東海コープ事業連合で既に基本事業の統合はすすんでいますので、まずは1+1=2の力が発揮できる所からスタートしています。

一方愛知県内では、組合員数・事業高とも有数の生協組織になるということで、県内一円を対象として「生活協同組合があつて良かった」と言ってもらえ、貢献ができる組織を目指すとの「志」は高く持つとしてきました(4つのめざすもの*)。それを端的に表すとすれば「コープあいち協同と福祉の心を広げること」を目標とする生協になろうになるかと思えます。

地の利に恵まれた愛知でこそその 食を維持、発展させる運動を

そのような「志」を具体化するのが、私たちの中心にある食をテーマにした「あいちを食べよう、日本の食をたいせつに！」の取り組みで、これは2年前から展開し始めました。このこと自身は餃子事件で失墜した生協への信頼の回復を図る取り組みでもありましたが、2年間実施してみて、今日的に地域で存在する生協の意味を考えさせるテーマでもあると認識するようになりました。それは全国で6番目になる農業生産額を誇り、温暖で地の利に恵まれ、巨大な消費圏も抱える愛知県(を中心に東海エリア)でこそ、命を支える食を維持、発展させる取り組みを生産者・商工者・消費者・行政一体にすすめられるようにすべきではないかということです(これだけの条件のあるところこそ、日本の自給率向上を支える6次産業のモデル的事業の組立てが出来るはず)。

臨時総代会以降、主だったJAの皆さんを訪問させていただいたり、地域の産物を何とか地域の活性化につなげたいと努力されている商工業者や関係組織の皆さん、それらを後押しする様々な施策を講じている自治体の皆さんとの協議の場を持ってきました。こうした皆さんに共通するのは、一次産業の後退に大きな危機感を持っていること、地産地消の推進を地道に展開していること、消費者の理解と協力が不可欠と考えていること等でした。そして前身の両生協が食の安全・安心の共有化を基礎に、先進的な実践を築き上げ共感を広げてきたことへの評価と期待を表明されています。

地域自給率向上と商工連携による地域活性化を、組合員の参加を通して

コープあいちでは、こうした県内の4者の関係を強固に築きながら、以下のような括りで、「あいちを食べよう、日本の食をたいせつに！」(略称:あい食べ運動)を飛躍的に発展させたいと話合っています。

- ① **産地連携・交流:**(ごはんもう一杯・地球温暖化防止、フードマイレージ、森林・里山再生、生物多様性、産消交流といったテーマを包括)
- ② **地域産品農商工連携:**(産消・地域産物加工、規格外や余剰産物加工、銘産品普及というテーマを包括)
- ③ **耕畜連携:**(新規需要米と畜産産物の循環、エコフィード(食品循環資源利用飼料)といったテーマを包括)

単に商品取引や商品活動を推進するということだけでなく、そのことの持つ意味合いになる「地域の自給率問題」や「商工連携での地域活性化」に貢献する運動と事業をすすめていこうということです。そして何より組合員自身の参加の中で、その一翼を担っていく取り組みにつなげていこうということです。

最後に、コープあいち協同と福祉の心を広げるの身近な地域毎の連携を「あい食べ運動」を軸に展開していきたいと考えます。 ※「4つのめざすもの」と「あい食べ運動」については8頁詳細を参照ください。

第6回東海交流フォーラム

つながり つむぐ 暮らしの未来！

主催：地域と協同の研究センター・東海交流フォーラム実行委員会

長引く不況、厳しい雇用情勢、消えない暮らしの不安。そんな中、3月13日に生協生活文化会館で開催した第6回東海交流フォーラムには118人のみなさんが参加し、基調対談では新・南生協病院オープンを目前に控えた南医療生協の成瀬幸雄専務理事とコープぎふの川崎直巳理事長から、「協同組合がつくる未来」というテーマで両協同組合の実践をご報告いただきました。以下、フォーラムの基調対談要旨と5つの分科会の概要を紹介します。

川崎直巳代表理事の挨拶から

今回の第6回東海交流フォーラムのテーマは、3月23日に南生協病院をオープンされる南医療生協のこの間の実践的な経験に学び、この地域での協同の可能性やあり方を、一緒に研究しようということがメインになっています。

私も少し報告させていただくことで問題提起もさせていただきますと思っています。

〈基調対談〉

コーディネーター 神山充氏(南医療生協)

では基調対談「協同組合がつくる未来！」を始めさせていただきます。

今は、一般的には景気が悪く、貧困とか格差社会と言わ

れています。しかしお金があるとかないとか以上に、先日も新聞にありました兵庫の病院で、寝たきりの患者さんの肋骨を看護師が、人間関係がむしゃくしゃしたからといって折ってしまうというように、人の関わりや社会に何か大きな歪みが出てきているのではないかと。そういうことがとても深刻な状況になっているのではないかと思います。

対談では「協同組合がつくる未来！」について、生協が経営としてどうしていくかだけでなく、どういう社会をつかっていくか、どういう未来をつかっていくのか、そんなことが話されるといいと思います。

そんなことで未来を見ながら、その中身を分析的に、研究的に取り上げることができればと思いますので、よろしくお願ひします。

「協同っていいかも?!」

南医療生協 専務理事 成瀬幸雄氏

今、まちの中を組合員さん、職員が協同して、南医療生協の37ヶ所めの事業所にあたる南生協病院の新築移転で走り回っています。地域で農業やっている方も含めて、ほとんどどんな方も、「南医療生協ですけど」と言うと、手をとめて話を聞いてくれます。10万人対話運動とっていますが、こんなことが日常的に行われています。

南医療生協の出発から、まもなく50年

南医療生協は、今から49年前に308人の組合員でスタートしました。今日現在は、組合員約61,000人、出資金も一口300円で集めた出資金が24億5千万円に到達しています。職員数も出発当時の5名から739名になり、これは常勤換算ですので、非常勤の方を一人とカウントしますと、今や1000人を超えます。医師の数も、1名から出発し、今は71名となって、これも実際の数でカウントし直すと100人くらいの数になるかと思います。看護師も312名となりました。

最初は5名の職員からスタートした南医療生協が、いまや1000人を越える職員に支えられ、6万を越える組合員によって支えられています。これは本当にすごいことで、ありがたいことだと思います。

前身は、農家の納屋(写真右)をお借りし、1953年、最初

の我々の診療がスタートしました。そして1963年に協同組合を設立して、星崎診療所も南医療生協に合流しました。これが我々のスタートです。今日では37ヶ所、こうした事業所があります。



みんなで知恵をあつめてつくった新南生協病院

そして、2006年8月からは新病院に新築移転するという事で、千人会議が開かれています。毎回100人以上の方が出席されていて、のべ人数で5000人を越えました。ですので、5000人以上の知恵を集めた病院です。千人会議は、グループ討論が主で、グループ討論をやって全体討論、グループ討論をやって全体討論です。参加された方は基本的に全員発言する仕組みをつくりながら、回を積み重ねてきました。

マスコミでも、中日新聞と朝日新聞が、「本当にみんなの

力を結集して病院をつくっている」と報道してくれました。特に3月4日には、さすが中日新聞は地元の新聞だと思いますが、見出しで「住民の声集め 理想の病院」と書いてくれました。記者の目から見てそう写ったのでしょう。それが、いよいよ23日にオープンします。



病院をつくるに当たり、多少力を入れたことが、ユニバーサル・デザインです。これは障害者の方でも、高齢者の方でも、小さなお子さんでも、わかりやすい動線であるとか、表示であるとか、建物にしていくということで工夫しました。これは実は、目の不自由な方や視聴覚障害の方、延べ人数400人前後の方に、現在の病院を利用してもらって、不具合についていろいろ意見を出していただきました。

また大学生協やめいきん生協と一緒に協働・夢プロジェクトをつくり、病院内にカフェ「ロッチデール」、ショップ「なんでもかんでも」、レストラン「レスポワール」というお店を開きます。ネーミングを見ても、「なんでもかんでも」は南医療生協がつけた名前だと思いますが、コープあいちとか大学生協はカタカナの「品」のいい名前です。「なんでもかんでも」売っている、売ってなかったらすぐに仕入れますというように、患者さんとかお客さん、一人のために全面的に起きますよという気持ちが、この「なんでもかんでも」という名前の中には込められていると思います。

出産でも、子育てでもみんなに支えられて安心できる
病院の中には、1年ほど前からスタートしている「みよし保育園」という認可保育園があります。病院というのは、女



新病院に隣接する「みよし保育園」(写真右)

医さんであるとか、看護師さんとか、特に女性が多いところです。まず心理的に、ここの病院は、女性でも働ける、子どもを産んでも働ける場所なんだというイメージを表現しています。保育園には、0歳から就学前の5歳までの子どもたちがいます。南生協病院では、産婦人科病棟から保育園を眺めながらイメージトレーニングをしてもらうわけです。保育園はいろんな意味を含めて、元気な子を産みたい、人間は生きていくだけで、たいしたもんだということを表現したかったわけです。

敷地内には助産所「はあと」もあります。南生協病院には産婦人科病棟がありますが、助産所もつくりました。助産所がどういう役割を果たしていくかですが、出産というのは、家で産もうが、助産所で産もうが、病院で産もうが、どこで産んでもいい。どこで産んでも、それを応援していく。都市の中で、競争社会の中で、バラバラにされている人間関係を南医療生協を通じて、協同組合を通じて、無理のないつながり、手のつながりあいができることを模索しました。



今、若いママたちが一番不安に思っていることは、この赤ちゃんと自分が向き合っていけるかということです。誰かに相談しようと思っても、旦那は夜遅くまで仕事で家に帰ってこない。おじいちゃんやおばあちゃんにことごとく言うのも気が引ける。孤立しているわけです。そういう時に助産所は、出産して自信がつくまでは、ここにいてもいいという個室を4つ確保しました。同じ仲間や助産師さんとこころゆくまで、ああでもない、こうでもない話してもらってもいい。それで自信がついたら家に帰ればいい。あるいは家に帰っても、自信をなくしちゃったという場合は、またいつ来てもいいということです。

保育園も同じですが、子育てが上手にやれんという時には、保育園に預けていなくても、相談したいとか、そこで実習したいとか、そういうのも全部OKです。協同組合はいろんな手をかけることはできないけれども、その場をいつでも提供します。そして、つくっていくのは、あんたたちです。つけれない人は、近所にいろいろな組合員さんがいて、人生の熟達したおばさんたちがいっぱいいるので、「助けて！」と言いやすい環境をつくりながら、誰かがなんとなく手を貸していく、そう空間がここにあります。

小学生や在日外国人のみなさんとも一緒になって

これまで、どういった病院を作ってきたかということです。この病院つくってきたエネルギーで、どういった協同が広がって

いるかお話しします。

知多市の新知小学校でのことです。文部科学省が全国で、子どもの体力づくり、日常生活の改善を進めるモデル校を100校選びました。結果的に、全国から5校が文部科学大臣から表彰されました。その中の一つに、新知小学校がありました。この新知小学校に3年間、南医療生協が係わりました。保健体育の先生や校長先生と南医療生協が一緒になってやってきました。今、子どもたちは塾へ行き10時ごろに終わりますと、食べざかりの子どもたちは空腹で、ポテトチップを1袋食べています。そこで尿のチェックをすると塩分が高い。その子たちの感想文では、「ポテトチップを食べるとこういう結果がでる。ポテトチップスを食べないと塩分が下がった。だから僕はポテトチップスを食べるのをやめることにした。」とありました。4年生、5年生、6年生になると、経験を通じてわかってくるんです。そういうことを文部科学省が見ていて、全国で5校の表彰の中の一校に、新知小学校入ったわけです。



協同の輪がひろがっている事例で、瀬戸市で在日外国人の検診・健康相談に関わり、2年目になります。エム・トゥ・エムと南医療生協とは親戚のような付き合いをしています。南医療生協の医師や看護師、栄養士、薬剤師等いろんなメ

ンバーがいて、外国人の健康相談をしています。本来は自治体の費用でやらないといけないと思います。失業させたり、就労させたりと勝手なことをやっていますから。そして経済的な力が落ちた時、結核になるとか、伝染病に感染する可能性が高くなります。それで、こうした試みを積み上げ、行政政策にきちんと提案していけないといけないわけです。



まとめとして「協同っていいかも?!」です。生きてるだけで、いろいろな知恵も湧き、存在するだけで意外といんじゃないのということをいって、私どもの紹介にかえさせていただきます。

神山充氏(南医療生協)

ありがとうございました。病院は、生活をつくる、地域をつくるというような内容が紹介されたと思います。地域生協でも、同じように、いろいろな組合員との関わりでつくってこられたと思います。コープぎふの経験を川崎理事長からお話いただきたいと思います。

変わったこと 変わらないこと

コープぎふ理事長 川崎直巳氏

1999年と2009年の10年間の数字を見て、特徴だけ申し上げます。組合員数137, 918世帯が、今年度は20万世帯を突破します。事業高では、245億円が257億円ですので、ほとんど変わっていないということが、一つの特徴になります。その中で、店舗が55億円で、今年の着地は53億円です。事業高としてはほとんど変わっておりませんが、中身は相当大きく変わりました。合併する前の生協で1999年には8店舗ありました。10年の間に恵那店を含め、新しい店舗を2店舗オープンし、3店舗をリニューアルし、4店舗を閉鎖するというをやってきて、現在6店舗で53億円くらいです。10年間増えてはいないけど、事業高としては確保しているということが一つの特徴になっています。

無店舗事業だけでは、組合員のみなさん、岐阜県下のみなさんの消費をまかなうことはできませんので、なんとし

ても店舗という業態で利用できる可能性をつくらなければいけないと10年間やり続けてきました。そういうことに挑戦しようと、中身を変えてきたことに意義があると思っています。1999年は4億円ほどの最終経常剰余金が出ておりましたが、今年の着地は、毎日胃が痛いような状態で黒字がでるかどうかというところできております。店舗に挑戦し続けるほど、生協全体の経営は厳しくなるというのが今起っていることのポイントだと思います。



したがいまして、10年の現状のポイントで第1番目のポイントは、組合員数は増えたんですが、生協の商品の利用

は減少し、利益が減っています。2つ目のポイントは、職員数です。正規の職員数はほとんど変わっていません。350人くらいです。定時（パートさん）が1.5倍です。サポーターとして配達している方はカウントしていませんし、業者に配達を委託している部分もありますので、かなり人数が増え、今の事業が支えられているということが大きな変化です。一貫して職員の役割、働きがい追求し続けていますし、その考え方は変わっていません。また労働と生協の運動に、どのように関わるかは、この研究センターでも研究し、学び合い、交流しということが続けていますので、大きなテーマとして継続しています。

組合員の活動と組織を振り返ると

そして3つ目です。組合員の活動と組織がどうなったかということ振り返ってみました。地域の組織母体は、5地区協議会ということで運営をされてきました。今は、10エリア委員会ということで運営されています。この参加されている人数はほぼ変わっていませんが、大きな特徴は市町村の組合員母体です。今県内全域をエリアとしておりますので、その組合員母体というのは、どうなっているのかということで見ますと、私が生協に入ったところから、1997年までは運営委員会というのをつくり、班会を開き、運営委員会をやって、地域のいろいろなくくりをつくり、そこで意見をまとめました。これはいろいろな活動をする母体に、実質なっていたと思います。そして、1997年に、運営委員会は負担感が多い、理事会の決定したことをやるための組織になっているのではないか。運営委員になっていただきたいと願いますと、生協をやめるということが、かなり頻発するようになりました。しかし運営委員をやるために生協に入ったわけじゃない。もう少し負担感を減らし、組合員のみなさんの自発的意志でやっていただけるようにしようと、コープ委員会に名前を変え、順番で班からというようなことはやめ、やってもいい人にコープ委員としてやってもらうように変えました。合併はその2年目です。しかし2年経っても、コープ委員会は93あって、925の方がみえました。その当時の岐阜県の市町村が99市町村でしたので、ほぼどこの地域にもそういう委員会があり、熱心に組合員活動が進められる場になっていました。

これが2009年度で見ますと、地域ごとで、こういう組織はありません。振り返ってみますと、これは画期的な変化だったと思います。このことが強く印象づけられたのは、今年の合併10周年の式典でした。

合併した時の岐阜消費生活協同組合の最後の理事長さんが、私にこういふふうに言われました。「川崎さん、生協は大きくなったね。しかし、私たちが住んでいる地域で、生協

は見えなくなっちゃいました。姿も見えないし、人も見えないね。」とすぽっと言われました。これが印象深く、茫洋とした認識はありましたが、そう言われればそうだと思います。地域で様々な活動が、きめ細かくやられたことと比べると、かなりの変化があることを実感しました。

東海での共通の理念・ビジョンづくりへ

最後の4つ目のポイントです。連合と会員生協が、いろいろなことをやってきました。東海の事業連帯、協同の取り組みは、歴史もあるし、到達度合いも高いレベルにあると思います。すでに1999年にコンピューターのシステムの仕組み、商品検査センター、無店舗事業の商品の調達や物流はすべて統一していました。職員もコープぎふから35人出向して占めておりましたので、共同した事業を、共同した体制や施設で支える、進めていくということは、ほぼ基盤はできていたと思います。今、2009年度を見てみますと、そのことに加えて、店舗の商品の調達や物流まで一緒に進めていこうじゃないか、経理や事務機能も共同化してやろうということまでできました。事業や経営に関わる実務機能については、ほぼ共同化が進んだといってもいいと思います。

ただ、私がポイントとしたのは、今でいうと東海の4つの生協と一つの事業連合が、一緒に進めています。でも、一緒に進めている組織が、何に向かって、何をやろうとしているかということについては、それぞれの生協は、理念・ビジョンや中期計画、年度ごとの計画は持っておりますが、その組織をひとつくりにした東海コープグループとしては、何をどう進めていく検討はこの10年くらい余り熱心にやってきました。3～4年前から、これではいけないのでグループの理念・ビジョンを、今年の総会で決定しようというのが、東海コープグループビジョン「未来につながるあんしん生活」ということでもとりまとめようとしている内容です。

最後に、協同組合は振り返りますと、目的は明確になっておまして、協同・互助の精神や、そのことで作るエネルギー、それによって組合員のくらしや将来のためになる可能性に挑戦しよう。そのために存在していると示されていると思います。こういう時代だからこそ、目的を振り返り、お話しした4つのポイントについて、方向付けをする必要があると思います。

文責: 大島三津夫

第6回東海交流フォーラム分科会報告

第1分科会 本当にうれしかったこと、困っていること、話せる人がいますか。

第1分科会は16人の参加で、8人ずつ2グループに分かれてお茶を飲みながら和気あいあいのおしゃべりをしました。共通の話題として、まずスリランカからの留学生であるビシャカさんにお話いただきました。

ビシャカさんのお話の中でいちばん印象深かったのは、「スリランカでは、一番大事なのは家族で、仕事ではない」とはっきり言われたことです。子どもは結婚するまでは親と一緒に暮らすのが普通で、親の悪口を言う子どももいないとのこと。家族、家庭を大事にしている様子がよくわかりました。

世話人のIさんからは、家族のつながりを考えさせられる事例が話されました。そのひとつは、鍋の話です。「冬は鍋がおいしいね」と盛り上がる主婦の会話の中で、誰かがポツリ「うちは子どもがいやがるから、年寄りと同じ鍋はしない。だから家で鍋したことがない」。それを聞いた誰かが「そうなのよね～。だから家では、一人鍋用のセットを買ったわ。あれなら一人ずつだから」「そうなんだ、でも場所とるね」と会話は続きましたが（一人鍋セットというのは、旅館でよく出る固形燃料がついた小さい鍋のこと）、「え～っ？」という顔をした人たちは、「姑と同居していない人にはわからないわよ」と言われたそうです。お母さんに内緒でゲーム機をお父さんに買ってもらって、隠れてゲームをしている子どもの

話もありました。

南医療生協の方からは、いっぷく運動について地域で活動しておられることをお聞きしました。世話人のMさんからは、小牧市での住民どうしのつながり「ふれあい」「まなびあい」「ささえあい」の活動の報告がありました。同じく世話人のTさんからは、男のつながり作りの話がありました。仕事人間の男性は、地域でのつながり作りにたいへんご苦労されているご様子です。でも結ばれつつある絆は、いろんな運動につながり、期待されています。

そんな話をうけて、家族や近所のつながりについて、グループでおしゃべりをしました。家族のつながりはまず食卓から、地域のつながりはまず挨拶から、それが参加者みんなの共通認識になった分科会でした。最後にそれぞれの思いをハートの紙に書いて貼り、分科会のまとめとしました。（写真下）

文責：伊藤小友美



第2分科会 “地域や近隣では何が起きているか” ～消費者被害、外国人、失業者、高齢者の一人住まいなど～

この分科会には、地域社会の中で課題を基に具体的な活動をおこなっている団体の担い手が集まりました。まずはじめに参加者全員でアイスブレイキングをして、お互いが楽しくうち解け合いました。そして本題に入り、現場で起きている困りごとや相談などを、わかりやすく4つくらいに絞って参加者全員が発表しました。その内容は、消費者被害事例と悪質業者の実態、地域に暮らす外国人の健康不安を医療生協とネットワークして支援、外国人も自主的な健康活動を広げていくこと、家族の支援や身寄りのない人からの相談に応えること、病院の専門職として身寄りのない人へどう



う対応していくか、ハケン切りにあった人たちへの支援を担うボランティアの力など、社

会的弱者といわれている人に対応する実践や課題でした。そして、研究センターで常設的に取り組んでいる「地域福祉を支える市民協同」パネルを通じて出会うことが出来た「ニート・引きこもり」の問題も語られました。

次に参加者は問題のキーワードを見つけて発表し、最後は自分が受け止めることが出来たことを「何かしょうじゃないか」という形でまとめ、一人ずつ話しました。参加者は生協の職員や組合員、農協の関係者、NPOやボランティア活動の担い手、山間地の福祉に関心がある研究者などでした。愛知、岐阜、三重、静岡、そして関西、各地からの多様な参加と多彩な話を手際よくコーディネート。

参加者の方々の日頃の取り組み姿勢がそのまま反映されて、生き活きとした雰囲気の中、大変有意義な分科会となりました。

第3分科会 まちづくりができる“たすけあい”の実践から

第3分科会は「まちづくりができるたすけあいの実践から」をテーマに、東海各地域でのたすけあいの実践を交流しあい、地域とくらしの未来を考えあいました。

まず、岐阜のグループホームの経験が報告され、日本の介護保険制度が手本としたドイツとの比較、介護保険制度のもとでの家族による介護負担の実態が報告され、ますます生協のたすけあいの会が必要になってくること、また沖縄での介護制度のよらないたすけあいの事例や、千葉での『みまもりネット』というシステムが、独居者の孤独死が減少させていることなどが紹介されました。

次に、地域に活力がなくなっている現状を改善する運動の報告がありました。耕作放棄地の増加、大型ショッピングセンターの進出による商店街が衰退する中で、地域のことを考える会を組織し、地域がつながる取り組みを進めている事例報告もありました。



これらの報告をもとに、参加者それぞれの活動や感想が語られました。主な発言は、「たすけあいの会」などは高齢者向けであり、若い世代との関係づくりが必要。商店街が寂れて行くなかで、中小企業の後継者たちに街づくりの提案をすると真剣に聞いてくれる。“コープ”のブランド力を上手く使う必要がある。若者が地域のために働ける条件作りが必要など若い世代へのアプローチの必要性が話されました。

また、地産地消による取り組みも話され、旬の魚で調理会を開いている事例、農家の余った野菜をレストランや直売所に持ち込んでいる事例、食料自給率100%の生活を宝だと思える人づくりの重要性なども語られました。

これらに共通するのは、地域の人々のふれあいや交流の場の必要性で、南生協病院では何かあると“お祭り”を開催していること、月に1回“若旦那会”という飲み会で小学生との交流をしている事例、中山間地の普通の暮らしが若い夫婦に新鮮に受け入れられ農山村での生活体験企画に希望者が増えている事実があります。そこでは、やはり地域に住んでいる人の何とかしようという気持ちが他からの支援を呼びます。結びでは、地域に住む人が主人公であり、その人たちが地域を作っていくことが必要で、生協運動もそのことを忘れない取り組みが必要だと確認しあいました。

第4分科会 協同組合地域社会の建設を考える ～レイドロー報告・南医療生協の実践から学ぶ～

第4分科会では、「レイドロー報告」について生協に関係する方々でも多くの方が内容を知らないことから、まず学び合うことを目的に、みかわ市民生協理事長の八木憲一郎さんから冒頭で「レイドロー報告」の紹介をしていただきました。

みかわ市民生協 八木憲一郎 理事長

何故、今レイドロー報告か。ミートホープ事件・冷凍餃子事件など、コープ商品の相次ぐ原料偽装・産地偽装や食中毒事件が起り、生協の安全・安心(信頼)が揺らぎ、さらに2008年秋以降の世界的な経済不況の影響を受け、生協の事業(経営)が大きな危機を迎えている。1990年代～2000年代の「失われた20年」や「生協法改正」による社会的役割の変化を踏まえ、生協の組織・経営・運営問題などのあり方(思想)が問われている。今、多くの生協がこの「3つの危機」に直面している。

レイドロー報告とは、アレキサンダー・F・レイドロー博士(元カナダ協同組合中央会会長)が国際協同組合同盟(IC A)の依頼を受け、1980年のICAモスクワ大会の提言(討論のたたき台)としてまとめた「西暦2000年における協同組合」のことであり、第1章で「信頼(創立・創業期)の危機」「経営の危機」「思想の危機」の3つの危機に触れ、第5章で「新しい世紀における協同組合のあり方=将来の選択」とし



て、協同組合が取り組むべき4つの優先分野を提言している。それは第1優先分野:世界の飢えを満たす協同組合、第2優先分野:生協的労働のための協同組合、第3優先分野:社会の保護者をめざす協同組合、第4優先分野:協同組合地域社会の建設である。

第4分科会では、この4つの優先分野、特に協同組合地域社会の建設について、南医療生協の実践を参考に交流しました。分科会での内容については、参加したメンバーで継続して学び合う場を持つと相談しました。その際は、地域と協同の研究センター会員の皆様にもお知らせしますので、ぜひご参加ください。

第5分科会 やってみよう！ 協同労働で協同組合をチェンジ

第5分科会参加者は19名でした。最初に、コープぎふの伊藤正志さんから、「枠に収まった働き方の中では、暮らしの変化に対応し難い現実があり、協同労働という働き方をどうみるか、地域での活動にはどのような組織的な発想の転換が必要か、自分がやれることを通じ、どのような変化を生み出していくことができるかを考える」と趣旨を説明しました。この後、研究センター理事の山口直子さんがブレ企画での内山節先生にもとづき「働く意味」の紹介がされ、協同労働の協同組合を取り上げた「雇われないで働く」と題したビデオを見たあと、めいきん生協の関口武史さんをコーディネーターとして事例報告と討論をしました。

■地域を生み出すワーカーズ

いきいきワーカーズ 天白 代表 生田美穂子さん

ワーカーズでは、仕事の依頼者との信頼関係をどう築くかとか、新たにワーカーズに入ってきた人との意思統一の難しさなど大きな課題があるが、経験を蓄積しながら次にどうするかを考えてきた。サービスの値段や基準がグループによって異なるが、そうした多様なグループが地域にあることが、サービス貢献にはよいと思っている。

■大学キャンパスの垣根を越える大学生協の取り組み

東海地域センター事務局長 大谷光一さん

南生協病院のオープンを機に、大学生協・医療生協・購買生協の協同組合間連携(夢・協働プロジェクト)が誕生した。連携といっても、協同組合間同士は逆につながりにくさがあり、垣根は高いが、事業化していくことで継続性を持たせたい。内山先生の講演で、長期計画を作る際に何を作るかではなく、「何が残せるか」と発想を少し変えてみると

み立てに変化が出てくるということについても話された。

■地域に生きる生協の店づくりへ

めいきん生協コープ小幡店長 岩本隆憲さん

自分で考える、現場で考えることを通じ、生協の店は何のためにあるのかをひたすら考え続けてきた。地域で必要とされる店となるにはどうしたらいいのか、うまいかないことだらけの中で、自分ができることを行動して来た。発想の背景には、世界の動きも視野に入れ、つながりを早急に作っていかねばという危機感があり、集団・個人の生き様が問われていると思う。

■地域包括支援センターの仕事を通して、利用者のくらしのなかから見えてきたもの

みかわ市民生協 ケアコープ豊橋 山口純子さん

豊橋市から地域包括支援センターを受託している。地域での小さな活動を続けていって欲しいという地域住民からの声もあり、こうした熱い声があるうちに、地域資源を見つけ出し、地域の心配事を横に展開していくことで、少しずつ解決につなげていくことが大切。

今まさにつながりを、みんなで気持ちを合わせてつくっていくことが大事で、枠をはずれてもやっていく気概と組織的な応援体制が必要と関口さんがまとめました。

第6回東海交流フォーラムの全記録は、後日報告集として刊行の予定です。

コープあいち「4つのめざすもの」と「あい食べ運動」の補足

- 1 「食の安全・安心」を第一に、生産者との信頼、顔の見えるおつきあいを強めます
- 2 組合員の願いに応える 頼りになる事業をすすめます
- 3 身近なところで、組合員が楽しく いきいきと元気になるコープをめざします
- 4 地域のみなさんとご一緒に、くらしやすい まちづくりをすすめます

① **産地連携・交流:** 農林水産業の実状、食と健康、環境、川上と川下の共生等のテーマを、交流や学習を通じながら組合員自身の関心に広げ、利用や運営参加につながることを目指します。

② **地域産品農商工連携:** 県内には四季を通じて全国にも誇れる産物や旬を身近に感じられる環境があります。こうした産物を直接も良いですが、加工していかせる技術とメーカーが存在します。そして実際利用する立場の組合員が関わって利用したい商品に仕上げ、生協はもちろんですが地域の小売店の皆さんも一緒に販売等することで地場産業の活性につなげていけることを目指します。

③ **耕畜連携:** 農業政策や設備投資の問題で揺れ動く取り組みではありますが、「みーとん」(田原豚)への飼料米給餌のスタートを力に、自給率の向上と農地環境の保全が広がることを目指します。

INDEX

巻頭	コープあいち専務理事 中野正二	1
第6回東海交流フォーラム		
基調対談	成瀬幸雄 & 川崎直巳	2-5
分科会報告第1分科会		6
第2分科会		6
第3分科会		7
第4分科会		7
第5分科会		8
巻頭補足		8

2010年 4月25日(偶数月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)
発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

代表理事 川崎直巳

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>